

長野県更埴市

坪山遺跡・判官塚古墳

—県営は場整備事業西部沖地区長尾根工区工事に伴う発掘調査報告書—

1995

更埴市教育委員会



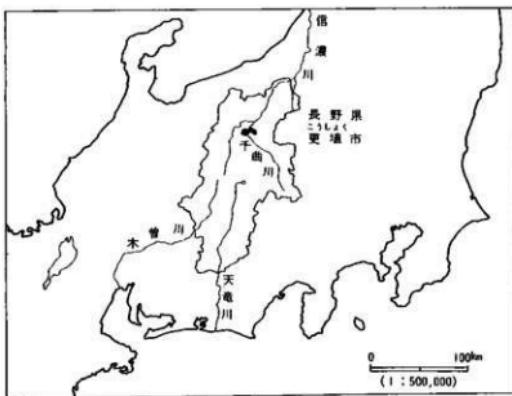
長野県更埴市

坪山遺跡・判官塚古墳

—県営ほ場整備事業西部沖地区長尾根工区工事に伴う発掘調査報告書一

1995

更埴市教育委員会



例　言

1 本書は、平成5年度に更埴市教育委員会が実施した「坪山遺跡・判官塚古墳」の発掘調査報告書である。

2 本書の編集および執筆は、調査担当者が行った。第3章第1節「縄文土器・石器」は、資料整理を行った竹田眞人が執筆した。

3 本書の写真および実測図は、調査担当者が作成した。

4 本書中の方位は、平面直角座標系第Ⅳ区の座標北を示す。また標高は、海拔mで示した。

5 本調査に伴う、遺物・実測図・写真等の資料は、全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物等には、下記の略号を記してある。

坪山遺跡・・・「T B Y」

判官塚古墳・・・「H G Z 2」(今回分)

「H G Z」(1984年調査分)

目　次

例　言・目　次

第1章 調査の概要

第1節 概要 1

第2節 調査の経過 2

第3節 調査日誌 2

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と環境 3

第3章 遺構と遺物

第1節 坪山遺跡

1 縄文時代 5

2 縄文土器・石器 5

3 弥生時代 16

4 古墳時代以降 17

5 その他の遺構と遺物 18

第2節 判官塚古墳

1 古墳の概要 19

2 今回の調査 22

第4章 まとめ 24

写真図版

第1章 調査の概要

第1節 概要

- 1 調査遺跡名 坪山遺跡（市台帳No. 112）・判官塚古墳（市台帳No. 90）
- 2 所在地及び 地理的特徴 長野県更埴市大字八幡字坪山・字判官塚
土地所有者 西部沖県営は場整備長尾根委員会
- 3 原因及び 公共事業＝県営は場整備事業西部沖地区長尾根工区
事業委託者 長野県長野地方事務所
- 4 調査内容 発掘調査 約1,750m²
- 5 調査期間 発掘調査 平成5年6月7日～平成5年12月8日
整理調査 平成6年7月25日～平成7年3月24日
- 6 調査費用 平成5年度 農政部局 4,060,000円 文化財保護部局 940,000円
平成6年度 農政部局 1,123,000円 文化財保護部局 260,000円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 矢島宏雄 更埴市教育委員会
調査員 佐藤信之 更埴市教育委員会
小野紀男 更埴市教育委員会
竹田眞人 筑波大学研究生
- 調査参加者 青木みなこ 猪渡久人 大井操子 小野義富 金井順子 金田良一
久保啓子 久保文男 小林千春 小林昌子 小林芳白 高野貞子
滝沢よし子 武井幸子 武井まゆみ 富澤豊延 中村久美子 中村文恵
羽生田真佐子 原田幸男 宮崎恵子 村山 豊
- 事務局 安藤 敏教育長 下崎 巍教育次長 山崎芳之社会教育課長
下崎雅信文化係長 矢島宏雄文化係員 佐藤信之文化係員
- 8 種別・時期 坪山遺跡 集落跡 繩文時代～近世
判官塚古墳 古墳 古墳時代
- 9 遺構・遺物 坪山遺跡 繩文時代 大溝跡 1基
弥生時代 住居跡 1棟
古墳時代 掘立柱建物跡 1基
出土遺物 コンテナ 10箱
判官塚古墳 古墳時代 墳丘裾の一部
出土遺物 コンテナ 1箱

第2節 調査の経過

本事業の実施にあたっては、平成4年9月25日の長野県教育委員会文化課、事業者の長野地方事務所・市農林課、市教育委員会文化係による保護協議により、平成4年11月中に事業計画地内の埋蔵文化財の確認のための試掘調査を実施し、範囲・調査費用等を決めることとなった。

試掘調査は、平成4年11月16・17日の2日間にわたり、24箇所のレンチを人力により掘削し実施した。その結果、坪山遺跡3,000m²ほどの範囲、現況水田面下30~65cmに埋蔵文化財が確認された。なお、計画地内の判官塚遺跡周辺は、試掘調査ができなかつたので、平成5年度事業実施中において、試掘調査を行い、その結果に基づき改めて協議を行うこととした。

発掘調査の実施にあたっては、事業が平成6年度に継続されることから、平成5年度は発掘調査を行い、平成6年度に整理のうえ報告書の作成を行うこととした。

平成5年度の発掘調査は、坪山遺跡を6月7日から8月9日に行い、判官塚遺跡は試掘調査の結果発掘調査が必要でないことになったが、事業地境にある判官塚占墳の埴丘壙の一部が用水路工事にかかることになり、工事実施時の12月6日から12月8日に調査を実施した。

平成6年度の整理・報告書作成は、他の発掘調査と併行して行った。

第3節 調査日誌

平成5年度

6月7日	本日より発掘調査始める	7月3日	昨夜の強風で現場テント飛ばされる
6月10日	重機による表土除去終る	7月8日	重機で2区と3区の間の土手を除去する
6月11日	判官塚遺跡試掘調査実施 遺跡確認されず	7月15日	5区で柱列検出
6月22日	1区の調査終る 2区の調査実測を残して終る 3区の調査にかかる	7月23日	写真撮影を残して、調査終了する
6月25日	3区ピット内より炭化物出土	8月6日	ラジコンヘリで全景写真撮影
		8月9日	機材撤去し、発掘調査終了する
		12月6日	判官塚古墳発掘調査始める
		12月8日	全ての発掘調査終了する

平成6年度

7月25日	整理作業をはじめる	3月24日	本事業完了する
-------	-----------	-------	---------



図1 坪山遺跡発掘調査風景

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と環境

発掘調査地は、東経138度6分15秒・北緯36度30分17秒付近に位置し、長野県更埴市大字八幡字坪山・判官塚に所在する。この付近一帯は、三峰山より北東に延びる姨捨土石流台地である。台地は、河川によって幾筋かの尾根状地形となり、本調査地は「長尾根地区」と呼ばれている。また、古代より名月の名勝地とされ、「山毎の月」と詩に詠まれる小さな棚田が急傾斜地に営まれている。

本調査地の北側に流下する更級川の対岸は、本事業の姨捨工区にあたり平成元年度に外西川原遺跡・宮川遺跡・東中曾根遺跡、平成2年度に舞台遺跡の発掘調査が行われてきた。また南側に流下する兎沢川の対岸は、横沢地区団体営営事業に伴い昭和57~59年度に下吉野遺跡・西久保遺跡・上ノ田遺跡等の発掘調査が行われてきた。

本長尾根地区においては、事業区域外にある判官塚古墳が更埴市史刊行に伴い昭和59年に発掘調査が行われている。また坪山遺跡周辺の事業対象地外には、坪山古墳や坪山経塚がある。

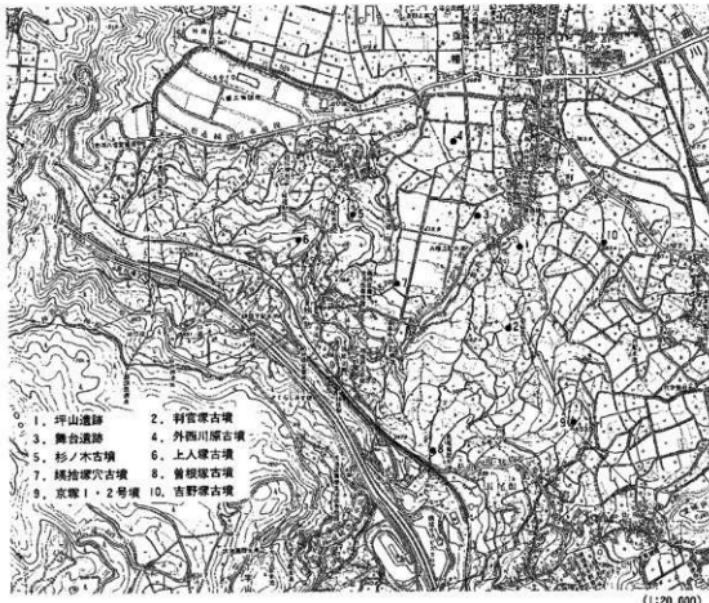


図2 調査地及び周辺の遺跡

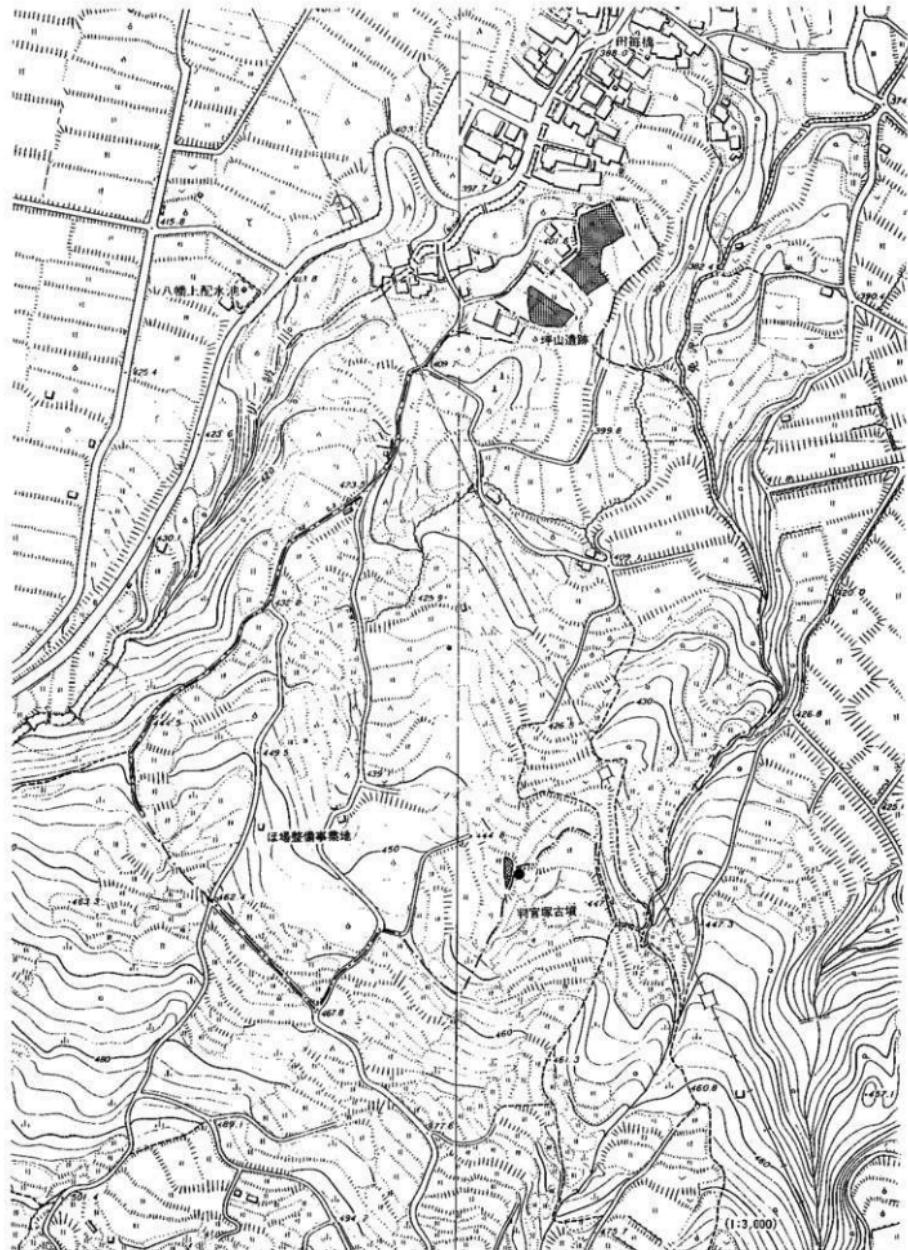


図3 ほ場整備事業地及び発掘調査地

第3章 遺構と遺物

第1節 坪山遺跡

坪山遺跡では、縄文時代の大溝跡1基、弥生時代の住居跡1基、古墳時代以降の掘立柱建物跡1棟、土坑1基の検出がある。発掘調査は、遺跡の中央部(1区)から始め、次いで上部(2区)の調査を行い、最後に下部(3区)の調査を順次トレンチを設定し、必要部分を拡張して実施した。

調査地は、急傾斜地であるために開田による切盛りが大きく、遺跡の大部分は既に擾乱を受けていた。そのため、検出された住居跡は、大きな畠壁にかかった部分のみが残ったものであった。2区は、開田により削平された部分にあたることから、遺物の出土はみられたが、遺構を検出することはできなかった。大溝跡は、遺構が深いことから開田による影響が少なかったものとみられる。しかし、大溝跡の中央部分は調査区域外となることから、全体のようすを把握することはできなかった。

1 縄文時代

大溝跡(図5)

位置：1・3区 幅：上幅2～4m、下幅0.5～1m 深さ：約3m 断面形：緩いV字形

方向：南回りの弧を描き北に流下する 新旧関係：土坑1は、本溝跡の覆土中に設けられている

構造：本溝跡は、調査区の中央部の1区において検出され、斜面部を大きく南側に弧を描き調査区の3区に流下する大溝である。検出された溝の延長は、約40mである。

遺物：溝跡覆土の黒色粘土層から最下層の黒褐色砂層中より、縄文土器片・石器が多く出土した。

土器は破片が多く、接合して完形となるものは少なく、当初から破片が遺棄されたと考えられる出土状態であった。また石器も同様な出土状況であり、石器の破片が多いのも注目された。

出土遺物の詳細については、次項で出土土器を分類し詳しく報告したい。

2 縄文土器・石器(図6～11)

坪山遺跡の大溝跡からは、かなりまとまった縄文時代の土器・石器が出土した。最近更埴市においては、上信越自動車道建設に伴う千曲川右岸の屋代遺跡群で、地表下3～6mに縄文時代前期から晩期までの集落跡が発見された。この発見により、これまでの更埴地方の縄文時代遺跡分布や立地を覆すこととなった。今回の資料は、更埴地方の縄文時代を考えるうえで貴重なものといえる。

(1) 土器の分類

縄文時代の土器は、中期初頭から前葉、晩期のものが出土している。中期初頭・前葉の土器が大半を占め、中期前葉・晩期は僅かである。これらの土器群を時期差により以下の4群に分類した。

<縄文時代中期> 第1群土器・・・梨久保II式併行段階

第2群土器・・・猪沢式併行段階

<縄文時代晩期> 第3群土器・・・離山式併行段階

第4群土器・・・氷式併行段階

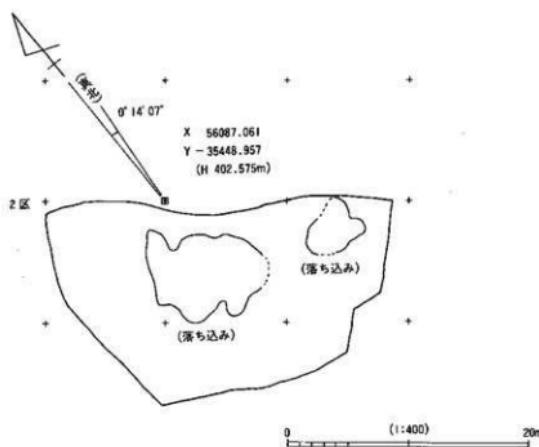
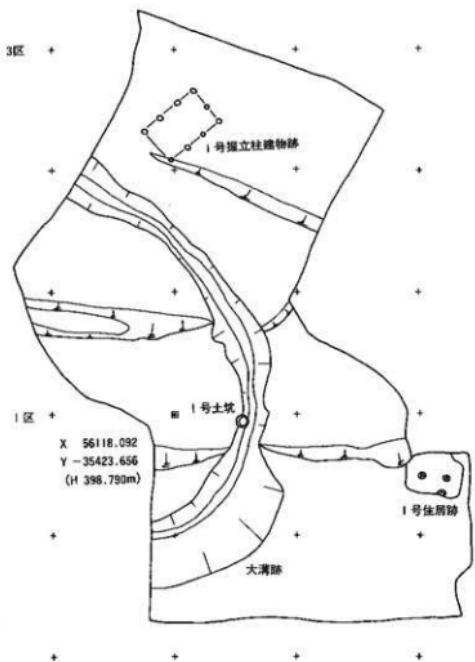


図4 坪山遺跡発掘調査全体図

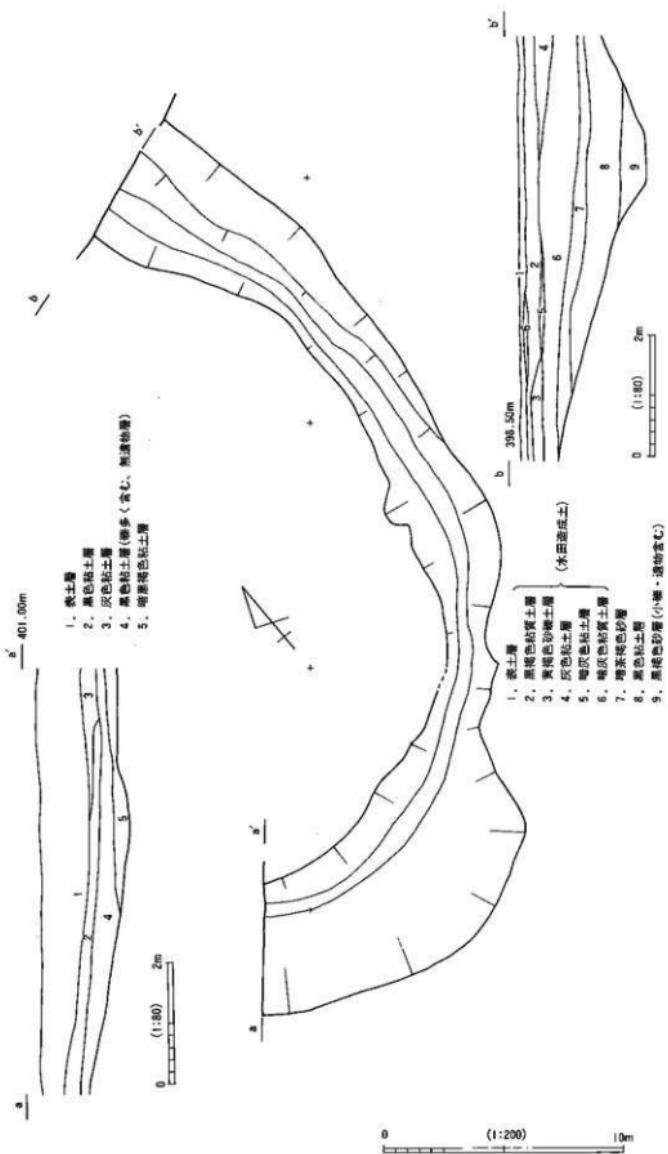


图5 大沟段全体图

(2) 中期の土器

第1群土器 製久保II式併行段階 器形全体がおおよそ復元できるものが、菱形の土器1個体と円筒形の土器2個体の3個体ある。菱形の1は、地文に単節L Rの縦文が縱方向に施文され、頸部に隆帯をめぐらし、そこから4単位で隆帯を垂下させる。また、隆帯に沿って半截竹管により沈線を施している。円筒形の2・3は、ともに隆帯と沈線を垂下させることによって胸部を4つに区画している。2は、第I文様帶に半截竹管による沈線と鋸齒状に刺突を施し、縦位に沈線を充填している。胸部には斜位に沈線を充填している。3は、平縁の土器で6つの突起をもち、地文は単節R Lの異条縦文を縦位に施文している。

第I文様帶に横位に沈線をめぐらし、その間隙を斜位の沈線で充填するキャリバー形の深鉢(6)、縦位の沈線で充填する円筒形の深鉢(7)がある。キャリバー形の土器の斜位の沈線上には一定の間隔で直行する沈線が施されていることが注目され、第II文様帶以下に同様の文様をもつものもある(8~10)。また、第I文様帶に横位に沈線をめぐらされ、三叉文が施されるもの(11~14)、刺突により鋸齒状文の施されるものがある(15~20)。

第I文様帶と第II文様帶を隆帯で区切り、その隆帯から縦位に隆帯を垂下させ胸部文様帶を区画する円筒形の土器(21~24)があり、隆帯間に山形沈線(26)、斜沈線(27)で充填される土器もある。菱形の土器では、1と同様なタイプであるが、隆帯に沿って施文される沈線が無文となっている間隙に延びて、沈線のみで文様を作っている(28~32)。胸部に隆帯が縦位に施されず、沈線のみを垂下させているものもある(35~37)。

39~42の土器群は、断面が半円形の隆帯で曲線を多用したモチーフを作り、上記の土器群とは非常に異なるものである。

47・50の土器は、胸部の文様帶の区画として該期より新しい時期のものとも考えられるが、「U」字・逆「U」字状のモチーフの範囲と捉え、中期初頭期に属するものと考えられる。

底部片には、58・59など結節をもつ単節R L縦文を地文にもち、底部にまで扁平な隆帯が施されるものと、無文の地文に同様な隆帯をもつものがある。

第2群土器 猪沢式併行段階 隆帯によって、胸部も横位に区画し、その間隙に平行沈線による斜沈線を充填するキャリバー形の土器がある(4)。斜沈線が充填される区画の間には、半截竹管によって成形された隆带上に、同工具により押引文が施されている。また、隆帯による窓枠状の区画が第I文様帶等にみられるものもある(48・51)。

53~57は、波状口縁、把手、突起である。53は、突起の頂部の内外に三角形の粘土紐を貼り付け、表面には曲線的な隆帯と、平行沈線が施されている。54・55は、突起または把手で、動物等の頭を連想させるような曲線的な隆帯が施されている。56は、断面が三角形の隆帯が配され、隆带上や隆帯に沿って平行沈線が施されている。

(3) 晩期の土器

第3群土器 離山式併行段階 63は、口縁部直下に幅広の沈線をめぐらせている。

第4群土器 氷式併行段階 5は、壺型の土器で頸部下に9本の沈線をめぐらせ、口縁部は面取りがなされている。64は、胸部片で細密条痕が施されるものである。

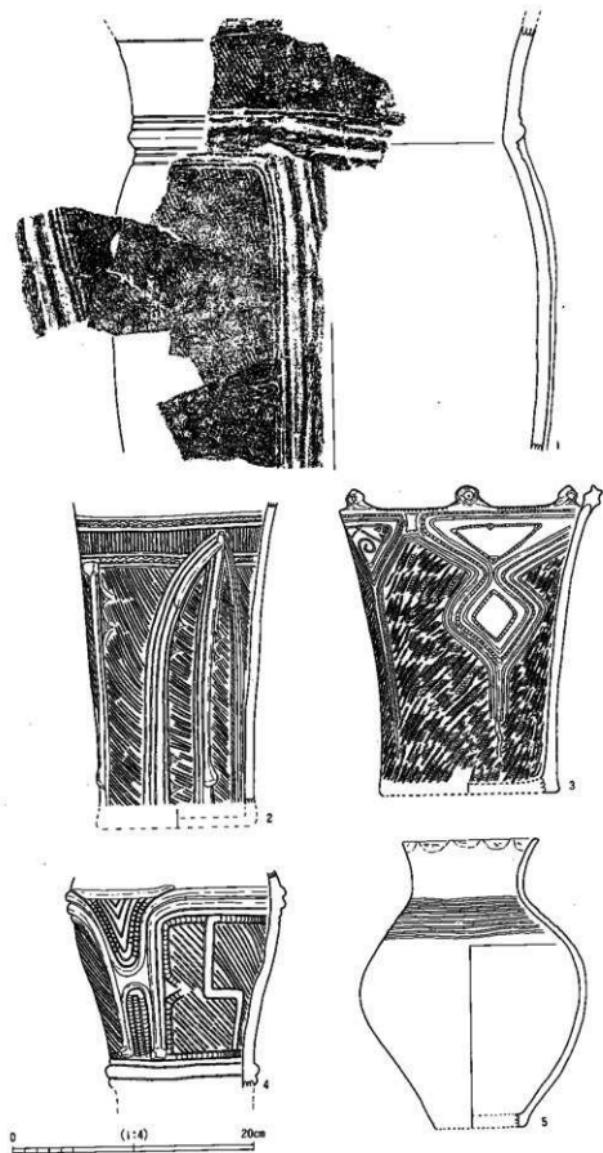


图6 大清跡出土土器(1)

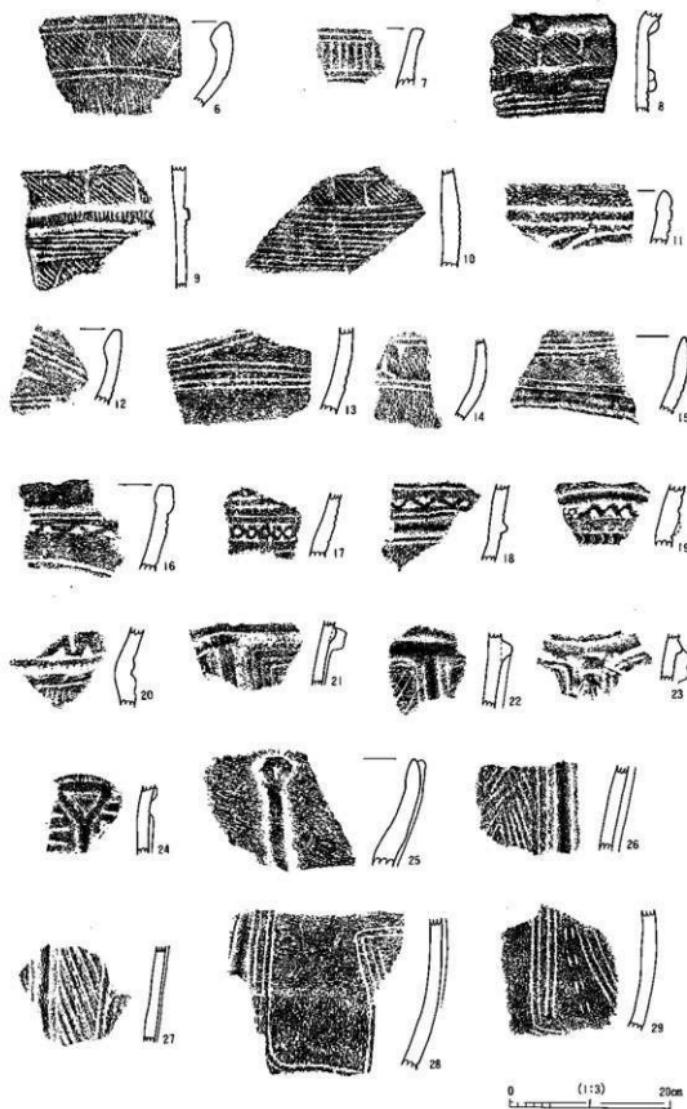


图 7 大兴庄出土器(2)

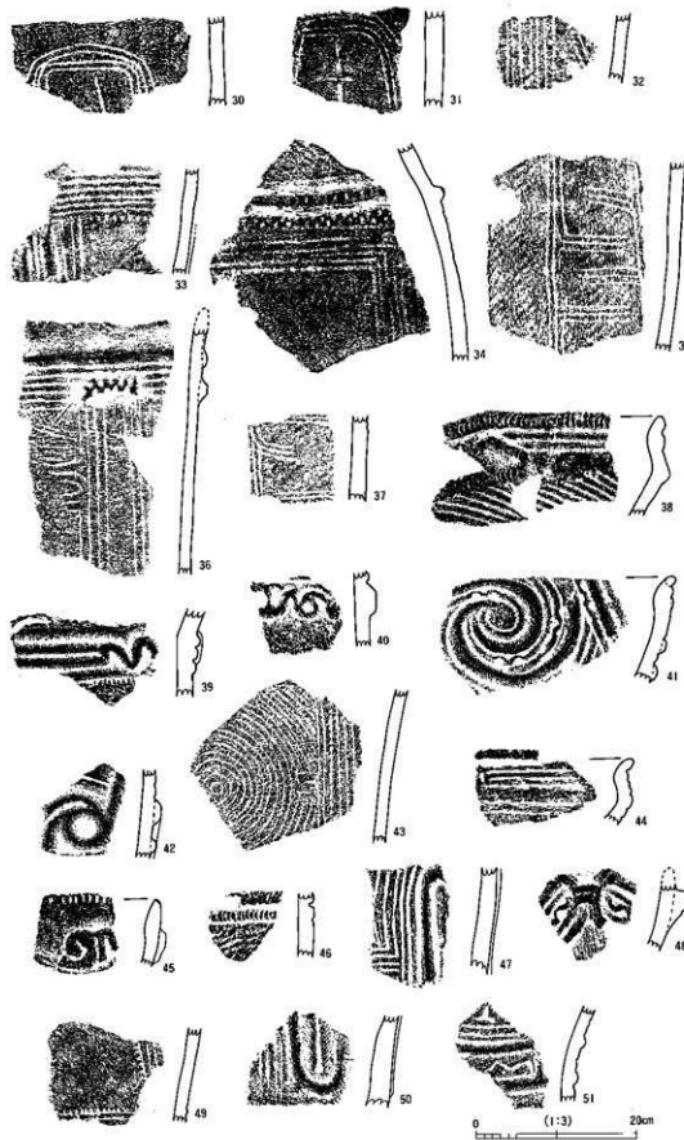


図8 大溝跡出土土器(3)

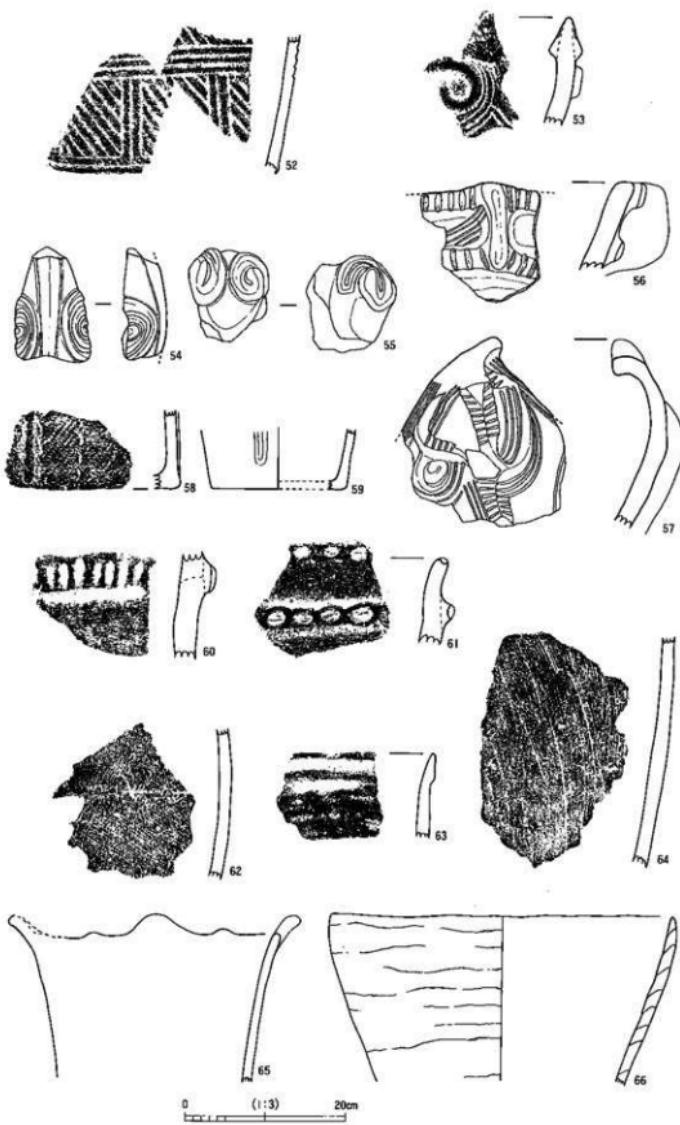


图9 大沟出土土器(4)

(4) 石器

坪山遺跡の大溝跡および、その周辺から打製石斧をはじめ、剝片や石材が出土している。特に、本遺跡出土の打製石斧と同じ頁岩の剝片が多量に出土していること、黒曜石の握り拳大の石塊も多数出土していることに注目された。剝片が多量に出土していることから、本遺跡で石器が製作されていたと考えられる。しかし、先の遺構等の報告で明らかなように、石器製作工房址は検出されていない。ここに図示したもののほかに、凹石がある。

石 鐵 図示した3点の石鐵は、いずれも凹基無茎鐵である。67・69は黒曜石製で、68はチャート製のものである。

磨製石斧 図示した3点の磨製石斧のうち、74・75の石材は安山岩で、77は珪質粘板岩である。

打製石斧 打製石斧の石材は、ほとんどが頁岩である。

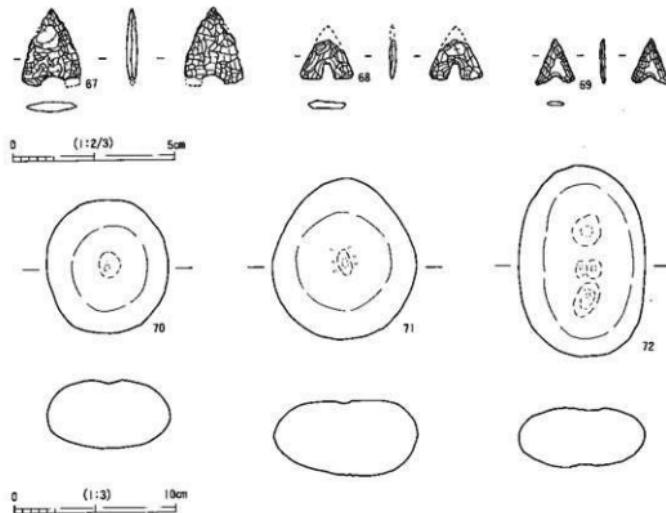


図10 大溝跡出土石器(1)

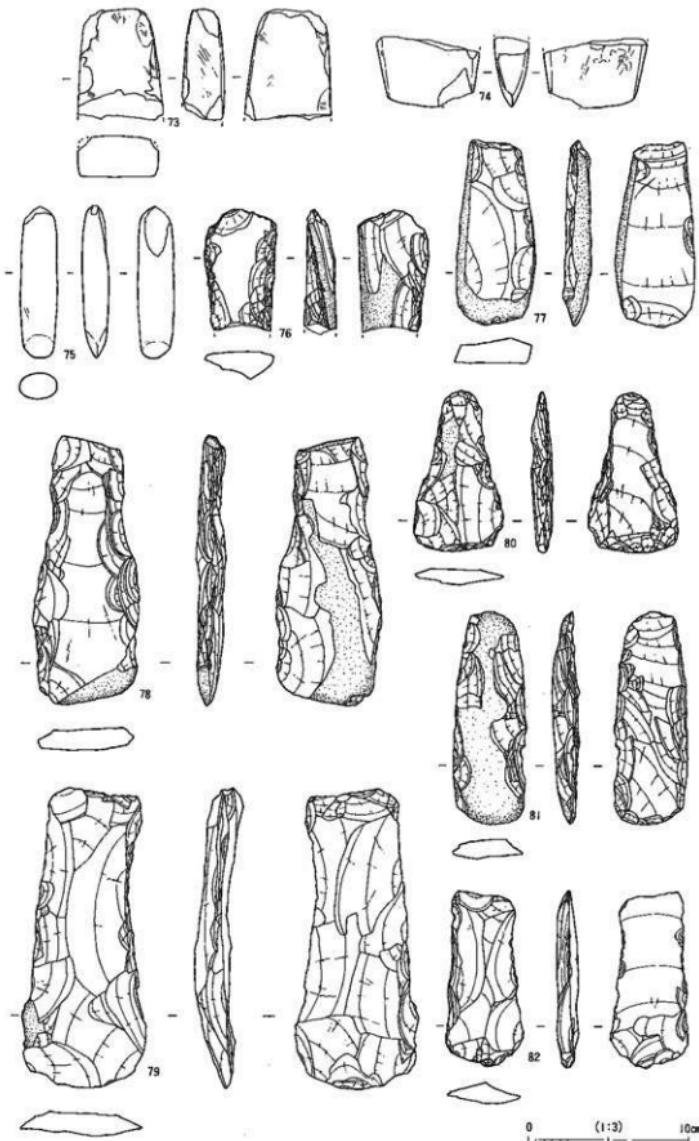


图11 大溝跡出土石器(2)

(5) まとめ

善光寺平では、縄文時代中期初頭の遺跡・遺物の検出例は僅少で、その存在さえも不明確であったが、近年高速道路建設などに伴う発掘調査によってその存在が明らかとなってきている。当更地では、八ヶ岳山麓の梨久保式、北陸の新保・新崎式と、その2系統の型式の影響を受けながら、「深沢タイプ」と「松原タイプ」の2つの土器型式が、現在は仮称という段階ではあるが提唱されている。

坪山遺跡の当該期の土器は、大半が梨久保式の影響を強く受けた土器として捉えることができる。図6(2)は、第I文様帶と第II文様帶を鋸歯状文や沈線文で区画し、そこから4単位の隆帯を垂下させる、という基本的な文様帶の構成は梨久保式と変わりないが、第II文様帶を平行沈線で充填するものは当地域の特色と言える。また、3の土器の突起も特徴的であるといえる。6・8~10は第I文様帶、もしくは第II文様帶の上部(第IIa文様帶)に斜沈線を平行沈線を用いてめぐらし、その上に一定間隔で沈線を直交する形で施す、または区切るというモチーフが特徴的である。28~31は菱形の土器の第II文様帶に隆帯を垂下させる。そして隆帯に沿った平行沈線が、隆帯間で幾何学的な文様を形作るのが特徴的である。というように、基本的には梨久保式と変わらないが、部分的に違った特徴をもっている。

上記の一群と違い、39~42・44・45は、非常に特徴的な隆帯のモチーフをもつ。梨久保式ではあまりみられない曲線的な隆帯である。いわゆる深沢タイプである。31~35は突起または把手であるが、該期では同様な類例を見ない。梨久保式よりは、深沢式にその系統をもとめられると考えられる。北陸の影響が濃い土器群であろう。中期初頭から中期中葉の焼町式までの間隙を埋める手がかりとなる一群かもしれない。

以上のように、坪山遺跡では善光寺平、千曲川中流域の土器群は、独立した一型式と理解するよりも、梨久保式の一つの地域色もしくはバリエーションとして捉えられるに留まる。松原遺跡とは異なった様相をもつ遺跡であるのかもしれない³⁵。深沢タイプの一群は、他の土器とは色調・胎土ともに違うようである。大半の土器が黒褐色系で石英・金雲母粒を含む粒子の粗いものであるが、深沢タイプの一群は灰色系で長石粒をわずかに含む粒子の細かいものである。深沢タイプの土器群は坪山遺跡にとって客体的な土器群であるかもしれない。

坪山遺跡では、北陸の土器そのものは、つまり新保・新崎式土器は出土していない。しかし、その影響を多分に受けたと考えられる深沢タイプ、また梨久保式土器を基本とする土器群が存在する。中期初頭の遺跡の検出例が非常に少ない当地域からのこれらの土器群の出土は、北陸と中部高地の間の空白地を埋める一つの手がかりとなりえるのではなかろうか。

土器の分類等については、寺内隆夫氏(財団法人長野県埋蔵文化財センター調査研究員)の御教示³⁶を得た。記して感謝いたします。
(竹田眞人)

参考文献

- (1) 三上徹也ほか第8回縄文セミナー「中期初頭の諸様相」1995年
- (2) 寺内隆夫『長野県考古学会誌』67号 1992年

3 弥生時代

1号住居跡

位置：1区
規模：4.5×3.1m以上
平面形：長方形
主軸方向：N-33°-W 新旧関係：切り合い関係なし
覆土：本住居跡は、段差2mほどの大きな畦の中から検出され、黒褐色粘土で埋まっていた。
床面：中央部がわずかに高い、
地山の黄褐色粘土を叫き締めた
ものである。
壁：山側（南西）の壁は、土
圧により谷側に倒れこんでいる
が、北側・南側壁はほぼ垂直で、
壁の高さは最大10cmほど検出さ
れた。谷側の壁は開墾時に切り
土されており検出されなかった。
周溝：山側の壁に沿って幅10cm、
深さ10cmほどの周溝が、そのま
ま住居跡外へ続いている。

炉：床面に焼土はみられなく、
検出されなかった。

柱穴：柱穴とみられる直径50cm、深さ40cmほどの円形の穴が山側

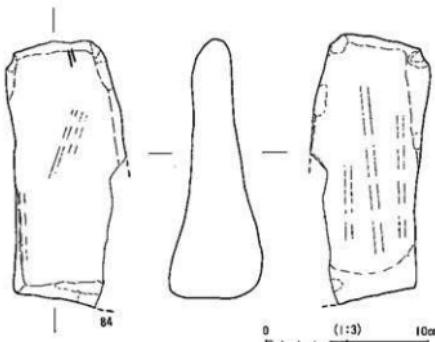


図12 1号住居跡出土石砥

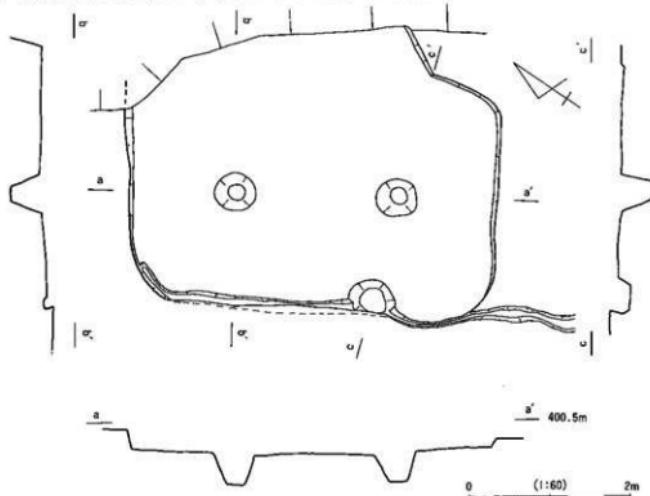


図13 1号住居跡

に2mの間隔で2箇所検出された。山側壁に接して直径50cm、深さ20cmほどの穴が1箇所検出された。柱穴と考えるよりも、周溝に関係した穴とみられるものである。

遺物：床面上から、弥生時代後期の土器片が数点と、砂岩の砾石1個出土したのみである。土器片は、小さく図示し得なかった。

4 古墳時代以降

1号掘立柱建物跡（図14）

位置：3区 規模：2間（3.30m）×3間（5.00m） 平面形：方形

長軸方向：N-78°W 新旧関係：切り合い関係なし

掘方：直径30～50cm、深さ20～60cmほどで、ほぼ垂直に掘りこまれている。途中に段を設け、柱痕らしき落ち込みを持つもの、底に偏平な石を置くものがある。

柱間：桁行の柱間は平均171cmで、北側が30cm長い。梁の柱間は平均167cmで、東側に棟持柱と考えられる柱穴があるが、西側では検出されなかった。

遺物：本建物跡に伴う遺物はない。

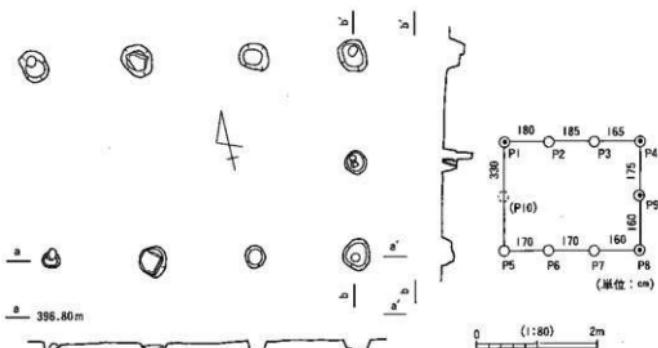


図14 1号掘立柱建物跡

1号土坑

位置：3区 規模：直径54cm、深さ20cm

平面形：円形

形状：斜めに掘り込まれ、底は平坦である。

新旧関係：大溝跡の覆土中に掘り込まれている。

覆土：黒褐色粘土により埋まっている。

周辺造構との関係：特に関係する造構はない。

遺物：本造構に伴う遺物はない。

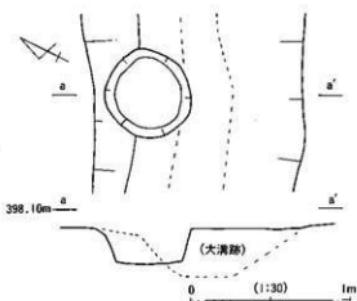


図15 1号土坑

5 その他の遺構と遺物

坪山遺跡上部（2区）においては、縄文時代から平安時代の土器片が散在して出土したのみで、明瞭な遺構やまとまった遺物の出土はなかった。2区で落ち込みとしたところは、わずかの窪地に土器片が散在しており、落ち込み周辺は水田の造成時に削平されたものと考えられるところである。

坪山遺跡では、大溝跡の縄文土器を除き遺物の出土はごくわずかで、図示できたものが5点ある。85は、弥生時代の彫描波状文を施した甌である。86・87は、古墳時代の高杯脚部で、86には5箇所の円形の透孔が穿たれている。88・89は、平安時代の小型甌・鉢釜である。

このほかに、土師器片や須恵器杯の小破片などもあるが、いずれも図示できない小破片である。

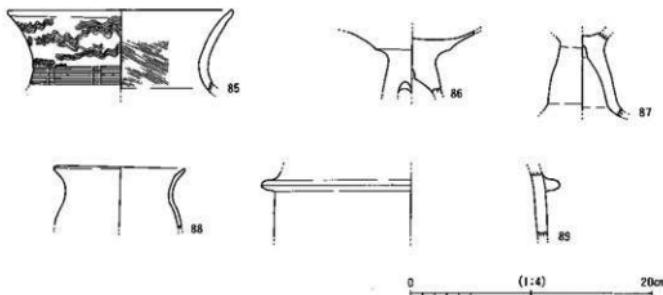


図16 坪山遺跡出土土器

第2節 判官塚古墳

判官塚古墳は、今回のは場整備事業区域となり現状保存されたが、墳丘の裾部分と考えられる位置に、は場整備事業の一環の排水路が敷設されることになり、工事に併せて墳丘裾部確認を目的とした発掘調査を行った。また、古墳周辺は「判官塚遺跡」(市古戸N-113 敷布地)として周知されていることから、この部分にはトレーンチ発掘調査を行い遺構の有無等の確認を行った。

古墳は、これまでに盗掘や耕作による削平により著しく墳丘の原形が失われている。また大きな石を組んだ横穴式石室は露出し、天井石のほとんども失われている状態である。なお、本古墳は昭和59年10月に、『更埴市史』刊行に伴い、横穴式石室部分の発掘調査が行われ、出土遺物から、6～7世紀前半に3回の追葬が行われているものと考えられている¹⁰⁾。

1 古墳の概要

墳丘：墳丘は開墾時に削平されて原形は不明であるが、直径約10mほどの円墳とみられる。

主体部：南西に開口した横穴式石室が露出しており、天井石は2石を残すのみである。石室は、右片袖の横穴式石室で、石室主軸はN-35°-Eである。玄室は長さ5.3m、最大幅1.9m、高さ1.7mと細長く、胸部中央が若干幅が広くなった胴張りである。側壁は一抱えほどの石を4～5段積み重ね、奥壁は大きな扁平な石を2石立て並べている。床には、拳大の石を敷き詰めている。羨道は長さ2.5m、幅1.3m、高さ1.0mである。羨道部の手前は、大きな石や拳大の石で閉塞されている。天井は長さ1.6m、幅0.8mほどの石を用いている。しかし、2石を残すのみで、他は取り除かれている。

遺物：羨道部の閉塞石の手前から、須恵器・土師器・馬具などの出土がある。石室内は、側壁の崩落が予想されたために十分な調査が行われていない。

土師器では杯(1)、高杯(2・3)がある。いずれも内面黒色処理されている。杯(1)は口径15.5cm、器高4.0cmである。高杯(2・3)はともに内面黒色処理された部を欠き、脚部のみのものである。器面が荒れており明確ではないが、ナデの痕跡を残しており、ミガキは観察されない。

須恵器では杯身(4～6)、高杯(7)、平瓶(8)などがあり、ほかにカキ目調整された甕の小破片もある。杯身は、口縁部の立ち上がりに変化が見られ、口径9.3～11.0cm、器高3.8～4.2cmで底部はヘラケズリが施され、(6)は平坦な底部となる。色調はいずれも赤茶褐色をしており、胎土も同じであることから同一の窯で焼かれたものと考えられる。

高杯(7)は、口径12.9cmの灰白色をした緻密な胎土をもつ、美濃須衛窯産のものである。図示できなかった破片に平瓶の小破片もある。横瓶(8)は口縁部を欠き、焼き歪みが著しい。

金属器では、馬具の轡(9)がある。轡は環状鏡板付轡で、鏡板は鉢具状立間のものである。また、土地所有者の話によれば、以前に石室内より勾玉が出土しているとのことである。

これらの遺物は、閉塞石の手前から括出土したものであること、遺物の特徴から、古墳の年代は6世紀末から7世紀初めと考えられるものである。

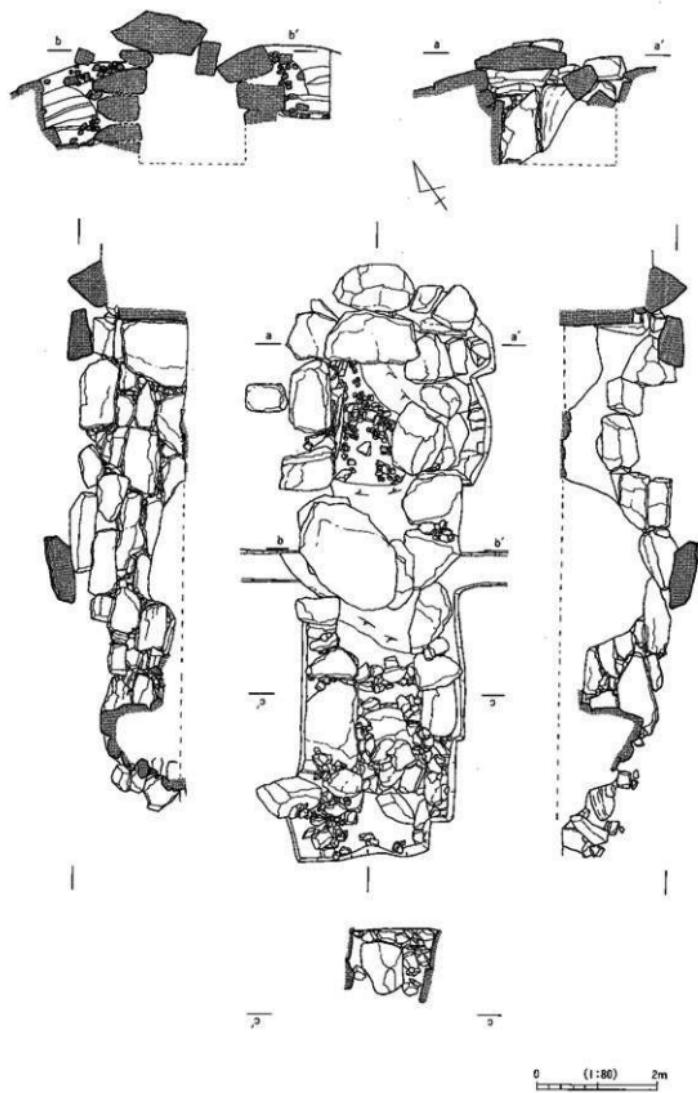


图16 判官冢古墳

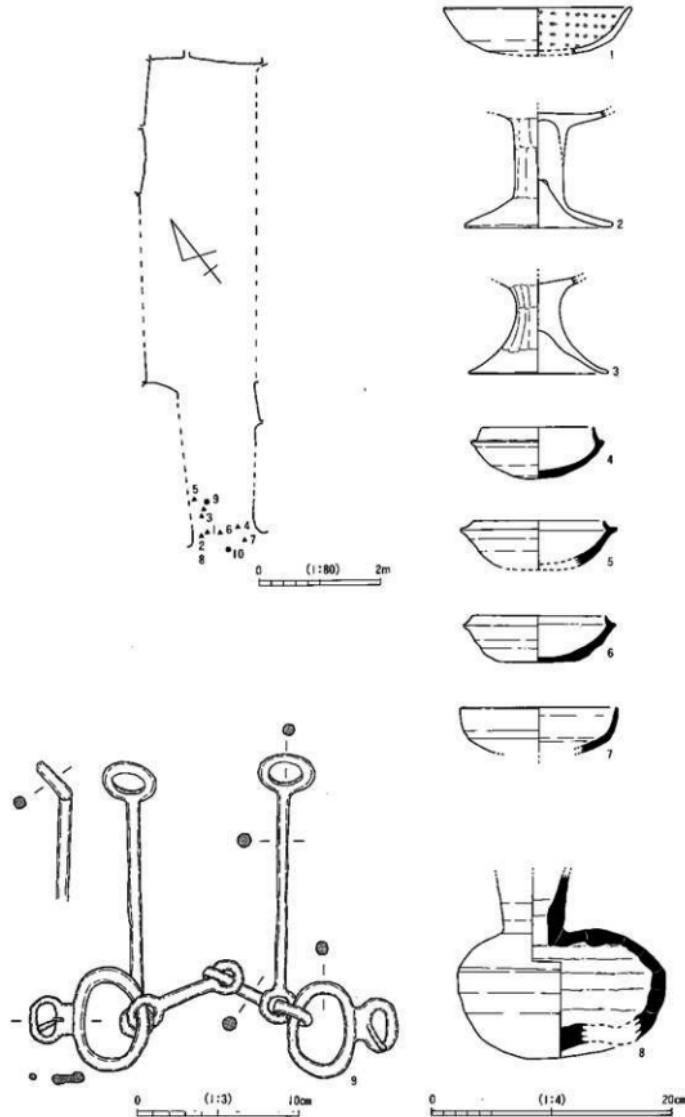


図17 判官塚古墳出土状況及び出土遺物

2 今回の調査

今回の発掘調査は、は場整備事業区域境界際にある判官塚古墳の北西側墳丘裾部と考えられる位置にトレーニングを設け、墳丘裾部を確認することを行った。しかし、墳丘は石室部分を残し水田開墾時に削られ、階段状の小さな水田（棚田）に造成されていることから、裾部も残存しているかどうか懸念された。調査は、排水路工事に併せ12月6~8日の3日間実施した。

また、判官塚遺跡については、遺跡の有無を確認するトレーニング発掘調査を、坪山遺跡発掘調査初めの6月11日に行った。

(1) 判官塚古墳

トレーニング：石室主軸に直交するように、事業区域内に幅1m、長さ7mのトレーニングを設けた。石室主軸交点から9.5m、石室床面から0.9m低いところに幅1.5m、深さ20cmの溝状の茶褐色粘土の落ち込みが検出された。この溝状の落ち込みは、地山を掘って造られ、水田造成時に墳丘盛土と共に削平され、造成されていた。トレーニングを山側（西）に拡張したが、水田造成時の掘削などにより落ち込みを検出することはできなかった。

この溝状の落ち込みは、部分的に検出されたのみで断定はできないが、地山を掘り込んで設けられていることから、判官塚古墳の墳丘裾部に設けられた周溝の一部と考えられる。

出土遺物：トレーニング内からは、土器部の内面黒色処理された杯・高杯の小破片があり、須恵器では杯・甌などの小破片がある。しかし、いずれも小片であるので図示し得なかった。甌の外表面はカキ目調整され、内面の青海波文がスリケンされているなどの特徴から、出土遺物は、古墳出土遺物と同時期のものと考えられる。

(2) 判官塚遺跡

本遺跡は、標高440mほどにある小さな平坦地で昭和55年度に実施した遺跡詳細分布調査時に古墳時代の土器片が散布することから「判官塚遺跡」として登録、周知されたものである。

調査は、事業区域内の遺跡の範囲とされるところに、重機を使用してトレーニングを設けて遺跡の有無等の確認を行った。トレーニングは3箇所設けたが、いずれのトレーニングでも遺物や遺構の検出は見られず、当該遺跡は残存していないことが明らかとなった。

本遺跡は、水田開墾時にすでに削平されてしまったか、あるいは隣接の判官塚古墳の遺物が耕作などにより散乱したものと考えられる。

(3) 小 結

今回の調査地は、既に墳丘が、階段状の小さな水田に造成された位置にあたることから、明確な墳丘裾部と断定するまではいたらなかった。検出されたこの溝状の落ち込みが周溝とすると、復元される墳丘は直径約10m、高さは4m以上と推測される。

なお、本古墳は事業区域外となり現状保存されたことは、記録保存の発掘調査の中で幸いである。関係者の理解並びに協力に感謝するしだいである。

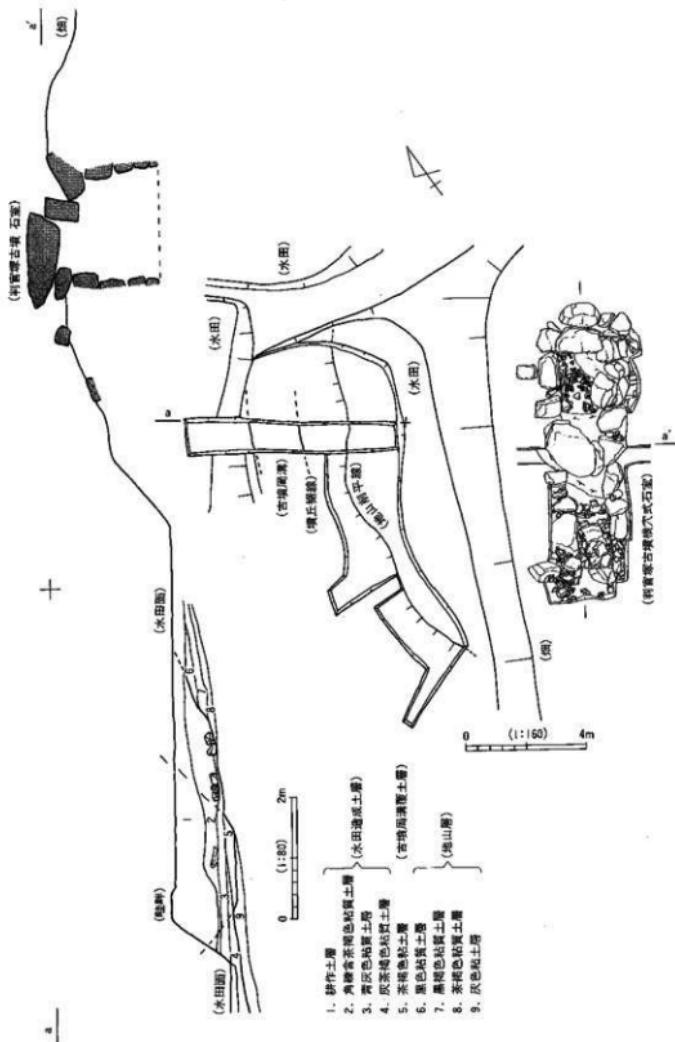


図18 判官塚古墳墳丘部発掘調査図

第4章 まとめ

今回の発掘調査では、姨捨土石流台地に當まれた縄文時代集落にせまる大溝の検出が特筆された。更埴市川西地区（千曲川左岸）の標高360m台の千曲川氾濫原から標高400mほどでは、これまでに桑原地籍の治田池遺跡が発掘調査され、縄文時代中期の土坑が検出されているのみで、集落跡・住居跡は検出されていないので、本遺跡でも確認できず今後の課題として残された。

一方、本地区の古墳には古墳時代前期～中期の前方後円墳ではなく、後期の横穴式石室を設けた円墳が点在しているのみで、また古墳群を構成する古墳もない。これまで、発掘調査等が行われた古墳には姨捨地区の杉ノ木古墳・稻荷山地区的振穴古墳・一本松古墳が調査されているが、十分な出土遺物がなく、築造年代を決定できる古墳がない中での本古墳の調査は注目されるものである。

1 坪山遺跡の縄文時代大溝跡について

本大溝跡は、およそ半分ほどが発掘調査されたのみで、全体像を把握するにはいたっていない。特に本大溝跡に伴う住居跡は、本事業区域内では確認することはできなかった。また、これまで実施してきた一連のは場整備事業に伴う発掘調査においても更級川対岸の舞台地区、あるいは免沢川対岸の横沢地区においても縄文時代の遺構は検出されていない。こうしたことから、本大溝跡の実体は不明なものとして残された。

また、本大溝跡出土遺物についても、縄文時代中期初頭から前葉を中心に溝内に廃棄された状態であること、さらに打製石斧を中心とした石器や剝片などの出土も本溝跡がどのような性格なのか推定するに至るものではなかった。

姨捨土石流台地の水田開発による遺跡の破壊、あるいは地滑りなどにより流失から免れたのが本溝跡のみであったのか、本大溝跡に伴う集落跡の発見は今後に残る大きな課題である。

2 判官塚古墳について

市内川西地区で確認されている古墳は、すべて横穴式石室を設けた円墳のみである。本市を含めた善光寺平で横穴式石室が導入されるのは、6世紀前半に無袖式の玄室部と羨道部を明確に区分しない型式のものとされ、6世紀後半に片袖で長大な玄室をもつ横穴式石室がみられるようになるという¹⁾。

全長5.3mという玄室規模は、森将軍塚古墳がある川東地区（千曲川右岸）の日ノ尾古墳（5.9m）に次ぐ、市内では規模の大きな古墳である。日ノ尾古墳についてはまったく出土遺物が知られていないので、本古墳において、羨道部手前出土ではあるが、一応の年代を位置づける遺物の出土があったことは、当市周辺の横穴式石室の導入、展開を知るうえで大きな成果となるものであった。

註

(1)森嶋 稔「第二編 考古」「更埴市史」第一巻古代・中世編更埴市史刊行会 1994年

(2)岡林孝作「長野県北部における横穴式石室の編年と系譜」「史跡森将軍塚古墳」更埴市教育委員会 1992年

図版1 坪山遺跡



坪山遺跡全景



八幡城跡地区
(撮影:更埴市役所
1992年10月)

图版2 坪山遗迹



大溝址全景



大溝跡断面



1号住居跡

図版3 坪山遺跡



1号掘立柱建物跡

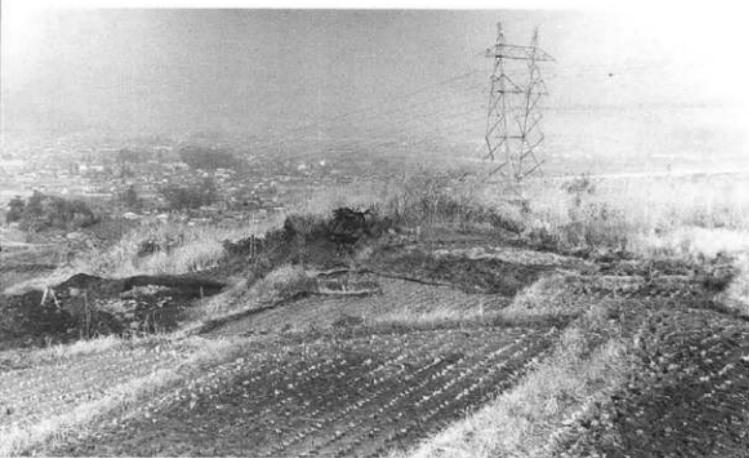


1号土坑



2区 落ち込み

図版4 判官塚古墳





2



3



4

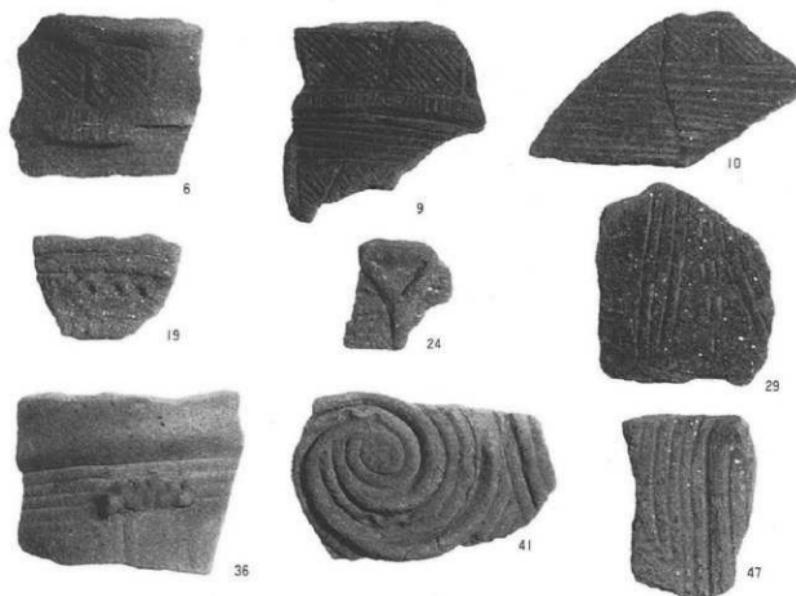


5

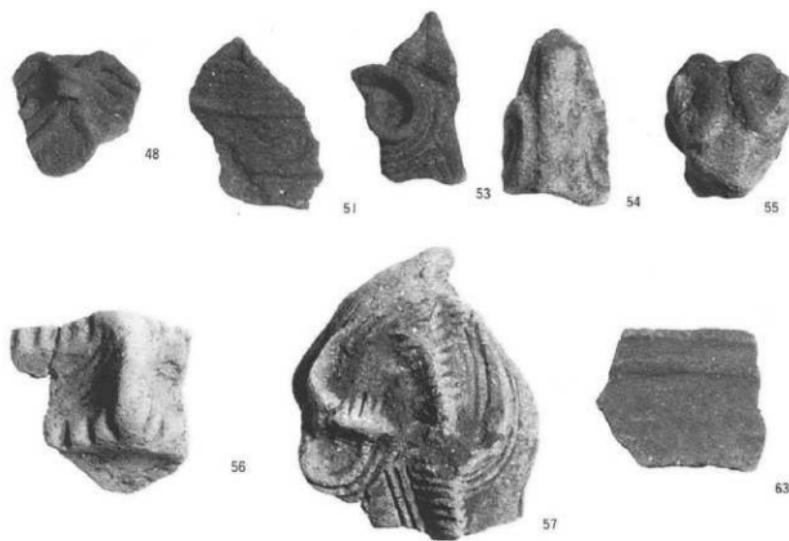
1 : 1/6 2 - 5 : 1/3

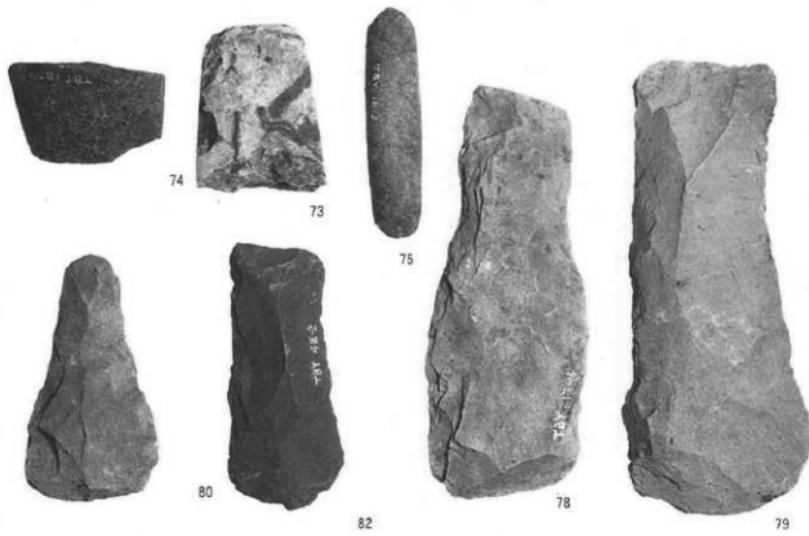
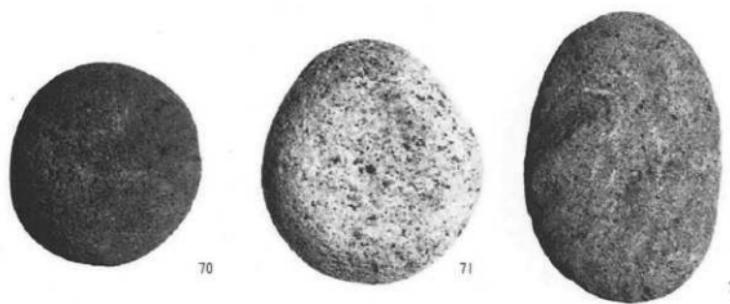
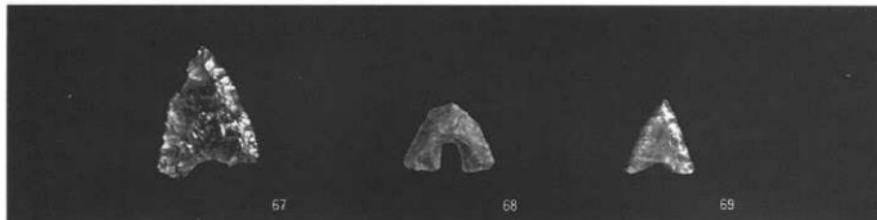
図版 6 塙山遺跡出土遺物(2)

第1群土器



第2・3群土器





図版 8 判官塚古墳出土遺物



4



6



8



9

報告書抄録

ふりがな	つぼやまいせき・はんがんづかこふん						
書名	坪山遺跡・判官塚古墳						
副書名	-県営は場整備事業西部沖地区長尾根工区工事に伴う発掘調査報告書-						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	矢島宏雄・竹田眞人						
編集機関	更埴市教育委員会 社会教育課 文化係						
所在地	〒387 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL 0262-73-1111						
発行年月日	1995年3月24日						
所載道路	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
坪山遺跡	長野県更埴市大字 八幡字坪山	20216	112	36度 30分	138度 6分	19930607 19930809 19931206 ~ 19931208	1,700 50
判官塚古墳	長野県更埴市大字 八幡字判官塚		90	17秒	15秒		公共事業＝ 県営は場整 備事業に伴 う事前調査
所載遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記	事項	
坪山遺跡	聚落跡	縄文時代 (中期) 弥生時代 (後期) 古墳時代 以降	大溝跡1基 住居跡1棟 掘立柱建物跡1棟 土坑1基	土器・石器 土器・石器 須恵器・土師器	大溝跡は幅2~3m、 深さ約3m。遺跡の大 半は開墾時の擾乱を受 けていた。		
判官塚古墳	古墳	古墳時代 (後期)	横穴式石室をもつ直径 約10mの円墳1基 墳丘裾部を確認	須恵器・土師器、馬具	1984年に一度発掘調査 が行われ、今回墳丘裾 部のみの発掘調査。		

坪山遺跡・判官塚古墳

-県営は場整備事業西部沖地区長尾根工区工事に伴う発掘調査報告書-

発行日	平成7年3月24日
発行	更埴市教育委員会
	〒387 長野県更埴市杭瀬下84番地
	電話 (0262)73-1111
印刷	信毎書籍印刷株式会社
	〒381 長野県長野市西和田470
	電話 (0262)43-2105